音の杜
OTOnoMORI

会報 Vol. 10 ● 2011.2.16 発行 ●

音の杜では、いま・・・・・

光りのまばゆさが日に日に増していますが、皆様お元気でお過ごしのことと思います。

3年で一区切りを迎える音の杜は、今年度の計画として次のことを進めています。どうぞご協力並びにご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

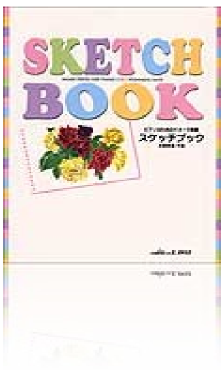
また、今号は、ユージンプラニング坂元勇仁様、佐藤玲子夫人が指揮棒を振っておられる混声合唱団南生田コーラスの上前勉様、長田幸雄様、いづれも音の杜会員である3名の方々にご寄稿いただきました。

CD 録音 決定！！

ピアノのためのイメージ曲集「スケッチブック」

発売予定:2011年9月3日

現会員の皆さんには、もれなく１枚を差し上げます！！



1993年に音楽之友社から刊行され、現在はカワイ出版から発行されている「ピアノのためのイメージ曲集“スケッチブック”」は、1992年の5月号から1993年の3月号まで『ムジカノーヴァ』に書き下ろしで掲載された、佐藤先生の子ども向けのピアノ小品43曲が収められた作品集です。

子ども向けとは言え、亡くなられる10年前に書かれたこれらの小品は、大人が演奏しても充分に演奏し甲斐のある美しい珠玉の作品揃いです。

今回音の杜では、この作品集を丸ごと録音しCD化することにいたしました。ピアノは、生前交流のあった東誠三さんにお願いしました。東さんの繊細で神秘なピアノが、このスケッチブックを鮮やかに描き上げてくれることと思います。録音は5月に行い、9月の演奏会当日に発売予定です。

演奏会 決定！！

「佐藤敏直の世界 ～邦楽作品とピアノ作品を聴きながら～」

2011年9月3日（土）17時開演

東京オペラシティ リサイタルホール

出演：米澤浩（尺八）、東誠三（ピアノ）、他

プログラム前半では邦楽作品を、後半ではピアノ作品を聴きながら、佐藤作品の魅力と真髄について演奏家、作曲家の方々にお話をいただきます。



ビンチョク先生、もう一度、逢いたいなぁ。

坂元 勇仁（レコーディング・ディレクター）

日本現代音楽協会、いわゆる「現音」が創立60周年記念の大イベント「東京現代音楽祭」を開催したのが1991年(平成3年)のことで、僕がビンチョク先生と初めてお会いしたのはその1年ちょっと前のことだった。当時、僕はまだ20代。大学院を出たばかりで、将来の自分にありもしない、大きな「夢物語」を描いていた。なにしろ世の中はまだまだバブル経済の余波の中にいて、僕も心のどこかで日本経済は「青天井」だと思っていた。僕を含め、みんながちょっと狂っていた頃だ。

ビンチョク先生の第一印象? 結構、濃いお父さん、ってとこだったかな。会う前から耳にしていた「ビンチョク」という響きから、どことなくネバネバした印象を勝手に持っていたけれど、予想以上に濃かったのを覚えている。それよりも何よりも、この濃いお父さんが、子どもの音楽教室関係の仕事をしているということが信じられなかった。(のちに僕はレコード会社で学芸関係の仕事を担当し、このジャンルに濃い人が多いことを知ることになる。もちろん僕も含めて)

一般にコンサート企画は「ハコ・タマ・カネ」が成功する3要素といわれる。ハコは会場、タマはアーティスト、カネはいわずとしれた金である。東京現代音楽祭は現音にとって未曾有の大企画、だからこのひとつでも獲得に失敗すると大変なことになることは明らかだった。当時は委員長の三善晃先生、末吉保雄先生、プロデューサーの坪能克裕先生、そしてビンチョク先生という錚々たる面々が、毎週のように目白の大会事務局に集合し、この「ハコ・タマ・カネ」についてウンウン唸りながら議論をしていた。それにしても、すごいキャスティング!あの迫力ある渦の中にいられた僕は幸せだった。

東京現代音楽祭は約1年半の制作期間を経て無事に終了した。そしてここに書くまでもなく、その成功の裏に運営資金集めを含め、ビンチョク先生の力があったことを忘れることはできない。正直言って、会社勤めをしながら音楽祭の重責を担うことがどれだけ大変だったか、それは僕も50歳を前にしてようやくわかるようになった。でも、どんな大変な時でもビンチョク先生は逃げなかった。「ユウジ、いいか何かあったらいつでも電話しろよな家は午前2時までは大丈夫だから」こうビンチョク先生は僕に言い、奮起を促した。これじゃ、《夜、遅かったので連絡できませんでした》という言い訳を作ることもできない。深夜のビンチョク先生の指示がどれほど、僕たちの心に安堵感を与えたかわからない。僕はそんなビンチョク先生の生きる姿勢から、働く男のカッコよさを学んだような気がする。そして、その頃から、こんな人だから子どもたちのための仕事ができるんだなぁ−そう漠然と思うようになった。

いつだったか忘れたけど、一度だけ、ビンチョク先生に誘われてバーと呼ばれる場所に行ったことがある。場所は渋谷、それだけは鮮明だ。なぜなら「ユウジ、最近渋谷に大人の遊び場がなくなっちゃたんだよ」とビンチョク先生が言ったからだ。そのバーがどこにあったのか今となってはわからないが、きっとあそこが先生にとって、渋谷での最後の遊び場だったに違いない。そして、二人で止まり木に座り、話した夜は僕にとって、「ホンモノの大人」に触れた、特別な夜になった。



僕はその後、92 年の夏からレコード会社でディレクターとして働きはじめ、現音とは少しずつ離れていった。でも、これは正直に告白するが「東京現代音楽祭」の経験や人とのつながりがなかったら僕のディレクター業は3 年ももたなかった。それほどまでに音楽祭で得たものが大きかったのだけど、僕がいつも思い出したのは《一流の男こそ、必死で働く》という、あの音楽祭で目の当たりにしたビンチョク先生たち大人の男たちの姿だった。

残念ながら、ディレクターとして僕はビンチョク先生と一度も仕事をする機会がなかった。でも、今、幸せなめぐり合わせで、先生が本当に大切にしていたカワイの『あんさんぶる』の編集に携わっている。毎号完成して考えるのは、「ビンチョク先生、楽しく読んでくれたかなぁ」ということ。先生は突然、僕たちの前から消えちゃったけど、そんなことを毎回思わせるんだから、心の中ではまだまだ生きているわけだ。それはそれで畏(こわ)いけど、やっぱり心強い。

そして今年、『音の杜』からお話しをいただき、初めてビンチョク先生のピアノ曲を録音させていただくことになった。あの大騒ぎだった東京現代音楽祭からちょうど20 年というメモリアルイヤーであることもだが、何よりも僕自身が先生の作品をレコーディングできる「近さ」にいたことが不思議でたまらない。もしかすると、僕の人生はビンチョク先生に引っ張られているのかな?なんて思ったりするのだ。

先生、レコーディングの時はちゃんと調整室に来てくれるのだろうか。まぁ、その時は少しだけ大人になった僕を見て欲しい。相変わらず大人の遊びを覚えることができず、バーの止まり木が似合わない僕だけど、ビンチョク先生の心意気だけは胸に刻み込んでいるはずだから。

「先生、今のテイクどうです?」

そう言うときっとビンチョク先生は、あの怒っているんだか、笑っているんだかわからないような顔をしてきっとこう言うだろう。

「アー、ユウジ、もう１本、もう１本」

そんな懐かしいビンチョク先生の声が僕の心に響く日を今から楽しみにしている。



佐藤敏直先生と混声合唱団南生田コーラス

上前 勉（混声合唱団南生田コーラス団員 ）

2002年10月、私たち混声合唱団南生田コーラスは、大谷惠美さんの斡旋でハンガリーの首都ブダペストにある聖アントニー教会で日本の歌を披露すべく演奏旅行に出かけました。

その年の2月に新宿京王プラザホテルのレストランで、敏直先生ご夫妻と幹事数名で演奏旅行の打ち合わせをしている時です。敏直先生が一言「やっぱり俺も行って歌わなきゃいけないかなぁー」とニヤニヤしながら呟かれました。今もその時の先生の笑顔と声が私の目と耳に焼き付いています。本当に私たち合唱団を心配して下さっていたのだと思います。まさかその年3月に先生が急逝されるとは思ってもみませんでした。ハンガリー行きには同行かないませんでしたが、遠くヨーロッパの地で敏直先生編曲の歌を精一杯歌ったのが、つい昨日のように思い出されます。

私たちは、昨年2010年7月創立30周年記念第8回演奏会を開催しました。敏直先生亡き後、2005年6回目、2008年7回目の演奏会を行っていますが、それまでの演奏会と何か違う雰囲気がありました。それは敏直先生の指導を仰いでいないことです。演奏会が近づくと私たちの練習場に何度か足を運んで下さいました。先生の顔を見るだけで私たちは緊張し、またアドバイスに納得し、終わると満足感が漂っていたものです。いつも厳しく指導してくれている夫人の玲子先生も素直に敏直先生の指示を聞かれていたものです。

私は第6回から第8回まで演奏会実行委員長を仰せ付かっていましたが、実は、第6回を終えた時、これで敏直先生の歌もある程度卒業したいと団員とも話し合っていました。しかし、第8回は見事に追悼「敏直先生に捧げる演奏会」になりました。勿論玲子先生の意思でもあったのですが、正直うまく出来るのか不安でした。冒頭にフォーレの「レクィエム」をオルガンとピアノの伴奏で演奏する。最後に歌うのは20年前の第1回演奏会で演奏された高村光太郎作詩・敏直先生作曲の「猛獣篇」です。四曲からなるこの作品の一曲は専修大学グリークラブのために男声合唱曲として作曲されたものを混声合唱用に編曲されたものです。初演から20年経ち、今の私たちで歌えるのか不安でした。

勿論玲子先生の厳しい指導の下に練習に練習を重ねましたが、今から思うと敏直先生が天国から「それじゃ駄目だよ。第一声を大事に丁寧に、棒を良く見て・・・」と励ましてくれていたように思えます。当日は900余席の川崎市麻生文化センターはほぼ満員、今までで一番多い聴衆が来て下さり、皆様からお褒めの言葉も頂きました。

「『ことしも生きてさくらを見ています』と茨木のり子は言った。日本語と日本的な情緒、そして深みも歌うことが出来るとすれば、合唱技術のレベルを超え音楽の楽しみ方を知っている証拠である。だから混声合唱団南生田コーラスは、私にとって大切なものである」（第5回演奏会）

敏直先生が私たちの演奏会のプログラムへの寄稿文から抜粋したものです。先生の私たちへの愛情溢れる思いが切々と胸を打ちます。

敏直先生と私は同年代で誕生日が三日違いです。終戦を小学三年生で迎え、幼な心に戦争の悲惨さを体験し、戦後の混乱と復興の過程で音楽を通して人の生き方を探求され続けた先生、酒をこよなく愛し、酔えば歌も口ずさまれた先生、演奏会打ち上げ後に、小田急線向ヶ丘遊園駅頭で先生が「そうだ、皆で『笹舟』を歌おう」と声を張り上げられたあの時の高ぶった気持ちを団員は忘れていません。敏直先生の曲を卒業してもっと色んな歌を―いやそれもいいが、混声合唱団南生田コーラスを永く続けられるよう皆で頑張って欲しいネ。上前さん―なんて天国から敏直先生が声をかけてきそうな気がします。

8回目の演奏会を終えて

長田　幸雄（混声合唱団南生田コーラス団員 ）

2010 年 7 月 25 日、川崎市麻生文化センター大ホールをうめ尽くす程のお客様をお迎えして、「混声合唱団南生田コーラス」は「創立30周年記念第 8 回演奏会」を感謝のうちに無事終えることが出来ました。第一部は玲子先生の念願でもありましたフォーレのレクィエム。ソリスト、オルガニストをお迎えしての演奏は団として初めての経験でした。第二部は今まで歌いためてきた曲集、そして「みなさんと歌いましょう」で会場の皆さんと全員合唱。

第三部は混声合唱組曲「猛獣篇」です。

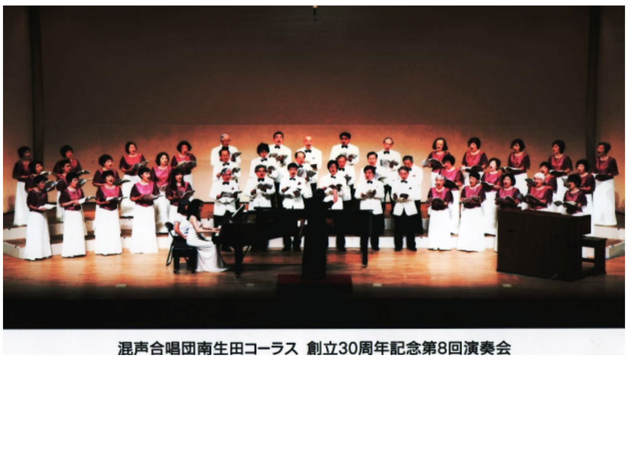
20 年前、創立10周年記念第1回演奏会で歌った曲です。その時の敏直先生の「新作によせて」にありますが「日本の暗黒へのステップの時代にこうして動物の力を借りなければ発言できなかった作者（高村光太郎）の内面が、これらの詩を単なるユーモアにおわらせない重さに仕上げさせているのであろう。初めて演奏会を開く『南生田コーラス』に光太郎のこうしたメッセージが相応しいかやや迷うところである。軽薄な音楽が氾濫している今日、少々重厚な作品を玲子先生に演奏して頂きたいとの気持ちでこの作品を献ずる」となっております。今回は初演後5年後に補筆されたもので、ますます中味が濃くなった気が致します。練習の成果は敏直先生が思い描かれた「猛獣篇」になったかどうか、ご健在ならお聞きしたいところです。

この 30 年を振り返って「混声合唱団南生田コーラス」と佐藤敏直先生を思うとき、まず感ずるのは「幸せな合唱団だな」と言うことです。それは偏にこの合唱団のことをイメージしていろんな曲を作って下さったことです。思い上がりかもしれませんが合唱団員の男女の構成や声量のバランス、力量そんなものをすべて考慮され作曲して頂いたのではないかと思われます。それは演奏会の前には必ず小田急線読売ランド駅前にあった生田幼稚園の練習会場にきてご指導をしていただきました。そのなかで団員一人一人を知りそれをイメージしながら作曲いただいたとすれば、地域一般の合唱団には無いすばらしいことだと思います。敏直先生がお見えになると団員は勿論ですが、玲子先生も緊張されていたようでした。全体にぴりっと背筋が伸びるおもいでした。最初の猛獣篇もそうでしたが「今出来たのよ」と言って楽譜をいただき練習する。「今日はここまで、後はまた次回に」とか出来立ての饅頭のような温か味のある楽譜でした。第二回演奏会では「傷をなめる獅子」、男声合唱を混声に編曲いただいたものですから、男声合唱の楽譜に赤鉛筆で混声パートを記入、そんな楽譜は見たことがありません。どれもこれも宝ものです。

五回の演奏会までのプログラムに敏直先生から、演奏会に寄せて毎回寄稿いただいておりました。それを読みますと、一般任意団体の混声合唱団の成立することの難しさ、玲子先生の日ごろの苦労話などユーモアを交え語っておられます。それだからこそこうして一生懸命楽譜を書き続けて下さったのだと思います。「南生田コーラスには専門的な意味での完璧さはいらない。だがお互いが呼び合い、心を通わすことができるならば、それは完璧さよりはるかに大切なことで、音楽のもともとの意味とも一致する。」（第 4 回寄稿　心が通いあうこと）と言っていただきました。大切に見守りいただき、知り尽くしていただいている合唱団だからこそ言っていただいた言葉と思い、胸をなでおろしております。

練習が終わって近くの居酒屋へご一緒したこともありました。豪快で楽しいお酒でした。練習のことが話題になり、「ジャカちゃん（私がジャカルタ赴任から帰国したところだったので先生がそのように呼ばれた）の歌い方は面白いね」と言われ、帰りの道すがらあれこれ考えたこともありましたがいまだ答えはでません・・・。

これからも敏直先生の思いをしっかり受け止め、また新しい目標に向かって歌い続けて行こうと思っております。



混声合唱団南生田コーラス 創立30周年記念第8回演奏会

作曲家佐藤敏直が見つめた日本と世界

山澤 昭彦（音の杜）

「音の杜」では、佐藤敏直先生が執筆された文章を整理して、「エッセー集」のような本にして出版する準備を進めています。

先生は様々な機会に文章を書かれていますが、中でも、編集長という立場で 20 年近くにわたり毎月書かれていたカワイ音楽教室の月刊誌『あんさんぶる』の編集後記は、「編集後記」という名前からは想像できないような多彩な内容になっています。そこで「エッセー集」の出版準備の一環として、この「編集後記」のデータ化を試みました。

敏直先生が編集長として「編集後記」を執筆したのは、1983 年 6 月から 2002 年 3 月まで。活字になった印刷媒体しかなかったため、『あんさんぶる』の原本をカワイ音楽研究所からお借りしてデータの入力作業を行いました。

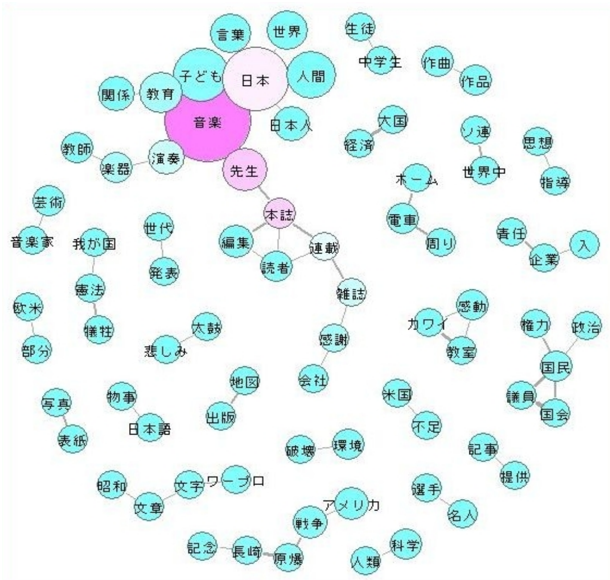
「編集後記」のデータ化は「本」の編集が目的なのですが、活字がデータ化されたことで、文章を統計的に分析できるようになりました。そこで、データ化された「編集後記」の文章を、「計量テキスト分析」という手法を使って分析してみました。

まずは、文章を名詞や動詞などの「語」に分解します。この「語」が文章の中にどのぐらいの頻度で出てくるかを計算して多い順に並べてみます。

名詞		サ変名詞		形容動詞	
音楽	319	教育	82	自然	73
子ども	151	関係	47	不思議	34
人間	116	話	47	必要	32
人々	102	演奏	44	平和	31
先生	92	編集	43	確か	25
言葉	77	表現	37	豊か	20
時代	77	戦争	33	簡単	19
世界	74	生活	32	危険	19
自分	59	意味	29	大切	19
文化	49	影響	29	好き	18
地球	47	作曲	28	自由	18
日本人	47	活動	27	大変	16
若者	42	存在	27	さまざま	15
大人	37	運動	25	いや	13
一つ	33	感動	25	幸せ	13
情報	32	研究	25	重大	13
社会	31	参加	25	不快	13
女性	31	予想	22	勝手	12
本誌	31	意識	21	真剣	11

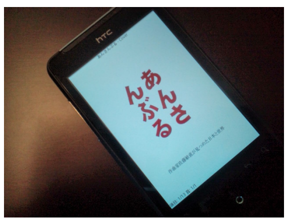
さすがに音楽関係の言葉が多いのですが、意外に思うような「語」も出てきます。

次に、文章の中に 10 回以上出てくる「語」を元に、「共起ネットワークグラフ」というのを描いてみます。「共起ネットワーク」というのは、文章の中で用いられた「語」と、その「語」と同時に用いられた語（共起関係がある語）を線でリンクしたものです。語の出現数が多いほど大きい円で、共起関係が強いほど太い線で表現されています。



この図を見ていると、使われている「語」の多様性に驚かされます。「音楽」という領域を中心に、作曲家佐藤敏直が見つめていた日本と世界の関心空間が浮かび上がってくると思いませんか。

最近は携帯端末でいつでも電子化された書籍を読めるようになりました。「編集後記」は、プロジェクトスタッフの手で既にデータ化されています。全編を電子書籍化して、皆さんがいつでも持ち歩けるようにしたいと考えています。



びんちょくごろく
敏直語録

No. 8

作曲作品ではなく、「佐藤敏直の文章のファンだった」という人は意外に多い。
先生の言葉には不思議な魅力がある。どの文章からも、厳しさと強さを支える深い優しさをみるように思う。ファンだったという誰もが、先生のそのとてつもない優しさに触れたくて、文章を何度も読んでは心に言葉をそっと置いて、大切にしまっているに違いない。
敏直語録では、佐藤敏直の「ことば」のきれはしや、鋭い「独り言」、また「散文」や「随筆」、音楽や教育への提言、編集長として毎月書かれていた「編集後記」等々、毎号少しずつ紹介いたします。
今回は、1988年12月に催された「専修大学グリークラブ第24回定期演奏会」のプログラムに寄稿された文章を取り上げてみました。。

『高村光太郎・草野心平 そして私』

私の手元に一冊の赤い表紙の詩集がある。赤い表紙と言ってもそれは赤い色のラシャ紙であり、詩集と言っても、中の文字は全部ガリ版による手書きの謄寫版印刷で、ザラ紙の袋とじである。
奥付には「1962年4月2日発行・著者高村光太郎・鐵筆草野心平・250部限定・定價四〇〇円・発行所歴程社」などと記されている。
「猛獣篇」と書かれた表紙の大きな筆文字と、中の詩文は、すべて草野心平氏が書いたもので、これが猛獣篇全15篇をまとめた初版本であった。
実はこの貴重な詩集は私のものではない。私の妹で、諸君のグリークラブの部長である鶴田教授夫人が貸してくれたものである。
高村光太郎の「智恵子抄」などを読むと、詩人の心なのか彫刻家の眼なのか、それとも夫婦愛なのか私にはその世界があまりにも想像を超えていて俄かに感動し難いけれど、この猛獣篇は素直に読める。
光太郎の七周忌の霊前に花束代りに捧げたいと、小学校の低い子供机でガリ切りをした草野心平は、光太郎の高弟であり、私の好きな詩人である。事実私は「窓」「ベーリング・ファンタジー」「日本海」などを歌曲に作曲したし、合唱のためにも幾つか書いた。
その草野心平筆跡によるこの詩集に接したことの驚きと喜びも手伝って、以前あまり気づかなかった光太郎の凄さのようなものを改めて観ることが出来た。
猛獣篇は、大正の末から昭和初頭にかけて書かれたが、その後しばらく中断して昭和12・13年頃にまた再開されている。光太郎ですら動物を借りて物言わねばならなかった時代、というべきか。
私は依頼を受けて今回四つの詩を選んだ。
そのどれにもある、逞しさや、皮肉と怒り、哄笑、そして悲しみは、今に生きる私にも充分通ずるものだ。一見平和で物の豊かなこの時代にこの詩を通じて一音楽人としてのある発言をしてみようと思ったのが作曲の動機となった。
若い学生諸君の柔かな頭はこれらの響きをどう抱えてくれるだろうか、楽しみである。
そしてまた、指導して下さった岡本仁先生が私と同年生れ、というのも、内心秘かに初演の聴きどころだと思っているのである。

（専修大学グリークラブ第24回定期演奏会プログラム　より）



敏直語録募集！

★ 出版物発行のために敏直語録の材料を集めます。

お手元に、「佐藤先生のこんな文章があります！」という方は、事務局までお送りください。

メールでもコピーのFAXでも形態はなんでも構いません。

編集人募集！

★ 出版物発行のために編集人を募集します。

多くの敏直語録の種分けや、敏直関連記事からの言葉の選別をはじめ、出版物発行までの編集作業をお手伝いくださる方がありましたら、ぜひご協力ください。

経験ありの方、大歓迎です！

スタッフからの一言メッセージ！

立春を迎え、花の便りもこれからは少しずつ聞かれることでしょう。「夏の暑さが厳しい時は、やってくる冬は寒い。」先人の言葉どおり、この冬は全国的に冷え込みました。あの猛暑を体験しながら、地球温暖化による気候変動についていやが上にも考えさせられました。そんな折、佐藤敏直先生の作詩・作曲による「地球のうえに」を歌う機会があり、地球を思いやった心優しい詩に、目先の流行に捉われず自然体で過ごすことの大切さを改めて感じました。

音の杜スタッフ山澤さんの文章解析を見て、敏直先生の語彙の豊かさに圧倒されました。大所高所から世情を見つめておられたのを今更ながら感じます。

（ 条谷 慶江 ）

佐藤先生とお別れしてから、もうすぐ9回目の春がやってこようとしています。今まではこの時期になると、冬の長さ、寒さに閉口し、ただただ春よ早く来いという気持ちで一杯でした。でも最近は、春が待ち遠しい気持ちと、ゆっくりと穏やかに時が流れてほしい気持ちとで、複雑な心境になってきました。私も大人になってきたのでしょうか。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。皆様の御健康と御多幸を心よりお祈り申し上げます。

（ 瀧澤 かおり ）

2月に入りましたが、春の訪れが待ち遠しいこの時期になりました。如月は、「衣更着」とも書き、着物を更に重ねて着ると言うと気象予報士が話してました。

暖かい陽射しの頃になると、敏直先生の〝鳥になれたらいいなって〟の曲を思い出し、心地良い優しさを感じ、勇気と元気をもらいます。

敏直先生の心に響く素晴らしい曲をずっと歌いたいと思っています。

（ 宮嶋 良子 ）

今回、敏直先生が月刊誌「あんさんぶる」に執筆した文章の計量テキスト分析をさせていただきました。分析の過程で垣間見えたのは、先生の幅広い見識と子供たちへの温かい眼差しでした。

先生の示唆に富んだ文章をいつでも手元に置いて読めるよう、いま話題の電子書籍にしようと計画しています。

（ 山澤 昭彦 ）

● 音の杜 ～佐藤敏直プロジェクト～ 会報誌 Vol. 10　2011 年 2 月 16 日発行
● スタッフ：大谷惠美（代表）／条谷慶江／瀧澤かおり／宮嶋良子／山澤昭彦／
● 〒101-0065 東京都千代田区西神田２－４－１ （財）東方学会 41 号室
tel. 03-3239-1906　fax. 03-3239-1907
e-mail：otonomori@otonomori.com　ホームページ：http：//www.otonomori.com